Museum News
Planning Office

絵：柳田 基

2012 春
展覧会／講演会

展覧会
アンデスのデザイン
Design in the Andes
2012.4.2（月）▶6.9（土）
10:00▶16:30（受付は16:00まで）
於：関西学院大学
　　西宮上ケ原キャンパス
　　時計台２階展示室〈入場無料〉

講演会
「アンデスの染織」
講　師：梶谷　宣子 氏
（米国メトロポリタン美術館終身名誉館員）
2012.5.12（土）13:30▶15:00
於：西宮上ケ原キャンパス
　　大学図書館ホール〈聴講無料〉

人面幾何学文様帽子断片

獣面文様ヴェール（女性用）

左：神像と双頭のピューマ文様頭帯
右：獣神文様衣服断片（縁飾り）

糸が彩なすアンデスの染織品、その技と美の魅力にせまる

「アンデスのデザイン」展

貴重なコレクションを初公開

昨年の夏にご寄贈をいただいた100点を超える南米アンデスの染織品の調査と整理が進み、その一部を公開する運びとなりました。今回の展示では、紀元前２世紀ごろのパラカス文化から16世紀のインカ文化に至るアンデス文明の各文化期に咲き誇った色とりどりの染織品を紹介します。

展覧会のタイトルは「アンデスのデザイン」、アンデスの染織品にみられる文様に注目しました。神像や人物像をはじめ、アンデスの山間に生息するピューマ、コンドル、ヘビ、鳥、魚などの動物が実にユニークに表現されています。

なかでも神像は動物を擬人化し、ヒトと動物とが合体した姿であらわされました。そこには動物を崇拝するアニミズムの宗教観がみられます。自然への畏敬の念をいだきながら、豊かな想像力から生み出されたデザインは、アンデス独自の世界を展開します。

染織品はアンデス文明の華

アンデス文明は、現ペルーの太平洋海岸地帯からボリビア西部の高地一帯に発達した古代文明です。アンデス文明の大きな特徴として、文字を持たないことがあげられます。代わりに文様が発達しました。染織品は、そのイメージを伝達する重要な役割を果たしたのです。

アンデスの高原地帯では、紀元前5000年ごろからすでにリャマやアルパカが家畜化され、いっぽう海岸地帯では、紀元前2000年ごろにワタの栽培がはじまります。染織品の材料となる獣毛や良質の木綿に恵まれ、紡績技術が発達しました。その紡いだ糸を編んだり、織ったり、染めたりしてさまざまな染織品が作られました。

一口にアンデスと言っても、時代や地域によって作りだされる染織品には違いがみられます。例えば、紀元前300年から約950年にわたって栄え、地上絵でもよく知られるナスカ文化では、毛糸による編物が盛んでした。１本の糸から編み上げられた人物や鳥は色鮮やかで、とてもチャーミングな表情をたたえています。時代や地域によって特色があらわれる染織品は、まさにアンデス文明の華といえるでしょう。

キャラクターが案内役

今回の展覧会では、作品解説を省きました。その代わりに、展示品の文様から生まれた可愛いキャラクターたちが作品の見どころを案内してくれます。彼らの声に耳を傾けながら、アンデスのユニークな染織品の世界をご鑑賞ください。

（博物館開設準備室長　河上繁樹）

展覧会報告

戦後演劇の世界

大阪労演とその時代 I
1949-1959

今はなき大阪労演の貴重な資料を公開する第一回展覧会を開催しました。戦後日本の新劇を支え、多くの人々に新劇に接する場を提供し続けた大阪労演の設立から 10 年の歴史が紐解かれました。

2011.10.24（月）▶ 12.17（土）
10:00 ～ 16:30（日曜祝日休館）
関西学院大学　西宮上ケ原キャンパス
時計台 2 階展示室
入場者数　1181 人
記念講演会参加者数　41 人

本室所蔵の資料を公開

戦後日本の新劇を支えた大阪労演の 10 年史

大阪労演（大阪勤労者演劇協会）は 1949 年 2 月に設立された日本の演劇鑑賞団体の草分け的存在です。2007 年の解散まで新劇を中心とする戦後日本の演劇を支え続け、関西に演劇文化を根付かせる上で大きな役割を果たしてきました。また個人や労働組合を母体とせず、職場などの仲間数名で作ったサークルを単位として会員登録し、皆でお金を出し合って安く演劇を見るスタイルは、その後各地で設立された演劇鑑賞団体のモデルにもなりました。

大阪労演では例会という名称で毎月演劇を鑑賞する会が持たれ、大阪公演にやってきた新劇の劇団公演があてられました。俳優座や民芸、文学座、新協劇団、ぶどうの会などいずれも東京を本拠地とする名だたる新劇団の公演が大阪労演例会に出演する主要な劇団として名を連ねています。

こうした大阪労演の活動の歴史を設立から最初の 10 年間で区切り、当時の例会に出演した劇団の公演パンフレットや脚本、舞台写真などの関連資料を展示しました。

自立演劇運動

戦後日本が求めた労働者の実態を映し出す演劇

大阪労演は単に演劇を鑑賞する団体ではなく、観客とともに新しい新劇を作り、演劇文化を育てることを目指していました。関西の地元劇団や人形劇といった幅広い分野の公演を例会で催すとともに、戦後演劇の復興にも力を入れました。

戦中、戦後と自由に演劇活動が許されなかった日本の劇団は、敗戦後間もない頃、戦前の演劇を繰り返すか、ヨーロッパの古典劇を公演するしかありませんでした。そのような状況下で観客が求める新しい演劇とは何かという道筋を立てたのが自立演劇でした。自立演劇とは勤労者演劇ともいい、労働者たちが職場単位で作った劇のことです。アマチュア劇ながら、労働者の実態にあった芝居をする自立演劇は、敗戦後の労働組合運動の盛り上がりもあり、新劇の新しい未来を示しているとして急速に拡大しました。しかし大阪労演が設立される 1949 年頃には占領政策の転換により労働運動が抑圧され、自立演劇運動も崩壊状態に陥っていました。これに対して大阪労演は自立演劇発表会を企画し、再建に力を尽くしました。展覧会では、自立演劇研究会の貴重な機関誌を展示し、当時の人々の声を紹介しました。

記念講演会

戦後演劇と大阪労演
–新劇運動の戦前・戦時・戦後–

11 月 5 日（土）には、大阪労演最晩年の会員であり、貴重な資料群を本室に寄贈していただくきっかけを作ってくださった本学文学部教授の高岡裕之先生にご講演いただきました。

お話は大阪労演設立後 10 年の歴史に留まらず、明治以降に興った日本の新劇史の流れをわかりやすくお話ししていただきました。旧劇（歌舞伎）に対する新派の興りがそうであったように、演劇はしばしば政治的な煽動にも利用されてきました。戦時下には多くの新劇団が戦争のためのプロパガンダ演劇を公演することを強いられ、敗戦後は自立演劇運動の高まりにより左翼化した新劇団が GHQ から危険視され、活動が制限された時期もあったといいます。こうした新劇の動きは大阪労演にも無関係ではなく、設立後 10 年間の会員数の推移を見ると、占領下から脱する 1952 年までは低迷が続き、それ以後飛躍的に会員数が伸びていることがわかります。こうした大阪労演を取り巻く演劇と政治的な動きのお話とともに、長年大阪労演を支えてこられた事務局長の故岡田文江氏との想い出話も語ってくださいました。

観覧者の声

アンケートより

各劇団の当時の状況が的確にまとめられていて、分かりやすかった。
（一般　男性　20 歳代）

昔の記事や作者のコメントなどがたくさんあり、面白かった。特に色々なポスターを見れたことは、本当に嬉しかった。本当にありがとうございました！！
（関学生　女性　20 歳代）

展示物の数がもっと多ければ良かった。
（関学生　男性　20 歳未満）

触れることの少ない戦後の演劇世界を知ることができた。
（関学生　男性　20 歳代）

ポスターのお名前を拝見するだけで昭和 25 － 30 年頃が目に浮かび本当ににありがとうございました。精神が若返りました。
（一般　男性　90 歳代）

両親が労演、労音の話をすることがありましたので記憶に残っております。戦後の演劇と労働者のつながりを知る機会になりました。
（一般　男性　50 歳代）

今よりももっと厳しい戦時下（戦後）という状況で、いかに自分らしく生きるかについて深く考えさせられた。
（関学生　女性　20 歳代）

もっと多くの展示品があるのかと思いました。Ⅱを楽しみにしています。（一般　女性　50 歳代）

大変興味深かった。今後も有意義な企画を期待してます。
（学院関係者　男性　50 歳代）

ポスターの見出しやチラシなど手書のものが多く、またそのどれもが丁寧で、見る人、読む人を考えて作られていたので、作っていた人はほんとうに演劇をたのしんで欲しいと思っていたのだと感じた。彼らが一生懸命劇をするから戦後の人々の生きる希望になったのだろうし、彼ら自身も演劇に生きがいを感じ生かされていた事がとてもうらやましく尊敬した。
（学生　男性　20 歳代）

大阪労演の存在を初めて知ることができた。
（一般　女性　30 歳代）

関西の演劇のルーツが分かってよかったです。
（学院関係者　男性　40 歳代）

関学劇研時代セールスマンの死舞台監督をした。ホームカミングデーに来て良かった。すばらしいなつかしい出会いだった。
（男性　70 歳代）

よく芝居をみにいっていた頃の事を思い出しなつかしかったです。
（一般　女性　50 歳代）

戦後演劇の初期の貴重な資料を見る事ができました。
（一般　男性　50 歳代）

解散時資料を有効に使って下さい。貴重な資料です。各所にて公開を企画して下さい。昔にタイムスリップしました。
（一般　男性　70 歳代）

昔の演劇界、その後の俳優さんらの前身がかい間見えた。現代の状況を展示してあればより解ったかもしれない。
（一般　男性　50 歳代）

アンケート統計

アンケート回答者数　577 人
アンケート回収率　48.9%

アンケート回答者内訳

一般	287
関学生	166
学生（その他）	49
学院関係者	30
無回答	45

都道府県別観覧者

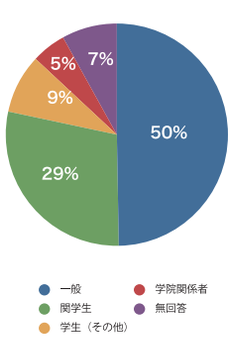
兵庫県	343
大阪府	140
京都府	20
奈良県	18
その他	29
無回答	27

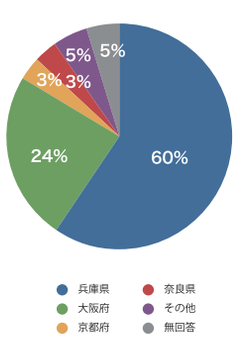
年齢・男女別観覧者

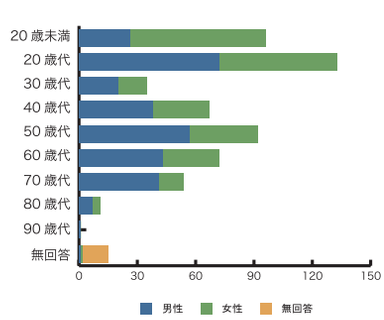
	男性	女性	無回答
20 歳未満	26	70	
20 歳代	72	61	
30 歳代	20	15	
40 歳代	38	29	
50 歳代	57	35	
60 歳代	43	29	
70 歳代	41	13	
80 歳代	7	4	
90 歳代	1	0	
無回答	1	1	14

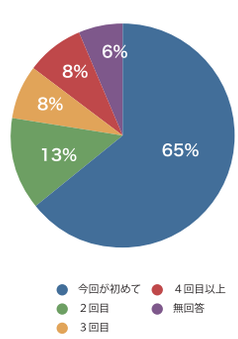
展覧会来場回数

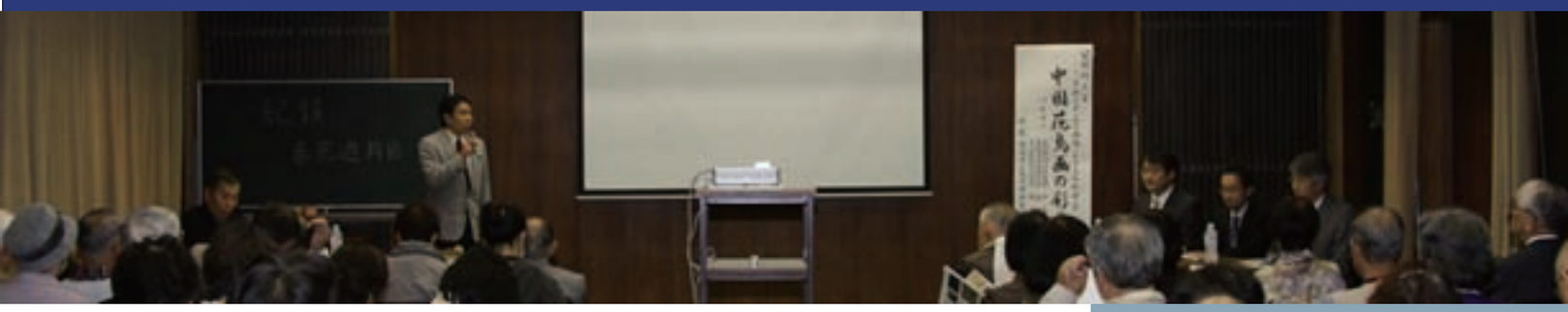
今回が初めて	371
2 回目	77
3 回目	45
4 回目以上	48
無回答	36











公開研究会

–実物とデジタル画像による文化財考察–

本室では学内で開催する展覧会と共に、学外関連諸機関との連携を推進し、その活動の成果を広く社会に公開することを目指しています。その一環として、高精細デジタル画像を活用した公開研究会を2009年度から開催しています。これは京阪神の美術館で行われている展覧会の会期に合わせ、展示作品とそれに関連する画像とを同時に観察し、見解を話し合おうとする催しです。今年度は以下のような内容で行いました。

第５回公開研究会

共催・会場：黒川古文化研究所
講師：立命館大学非常勤講師　西尾　歩氏
東京国立博物館研究員　塚本　麿充氏
黒川古文化研究所研究員　竹浪　遠氏
題名：中国の花鳥画
—彩りに込めた思い—
開催日時：2011年11月12日(土)13:30～

今回の公開研究会は、これまでの４回の開催経験を踏まえ、二つの新たな試みを行いました。

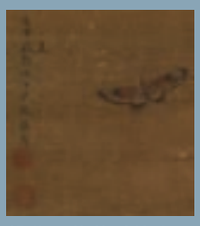
その一つは、複数の講師の意見交換を通じて、作品の持っている姿を探ろうとしたことです。これまでは、講師と会場に集う人たちとの意見交換を通じて、より深く作品にせまってきましたが、今回は３名の講師と司会者とのやりとりが中心となりました。その結果、作品を見る目が専門的であり、既に準備されていた、という印象の強い会になり、これまでとの違いが浮き出た結果となりました。

この研究会では着眼点が詳細な部分に及んだり、複数の異なった見解を目の当たりにし、それが展開していく様子を追うことができます。これらのことを支えるのが、高精細デジタル画像であることは確かです。従来の図録、書籍の挿図、スライド（アナログ）の活用とは様相が異なっています。その差異をより明らかにし、活用の可能性を探るため、引き続き研究会を開催していく必要があると考えています。

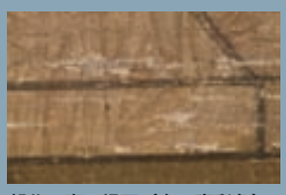
二つめの点は、これまでの４回の研究会では銀器、鏡、刀装具、染織と工芸品を取り上げてきましたが、今回は絵画を取り上げました。その意図は、工芸の分野でみられた高精細画像の有効性が、絵画でも通じるかどうかを探ることにありました。裏彩色の有り様などを示す拡大画像、微妙な色合いの提示画像等は、今後の活用の展望を拓くものでもありました。なお研究会の内容は、明の画院画家、紀鎮の「春苑遊狗図」をめぐって、色調の明暗、グラデーションのつけかたの繊細さなどが話題になりました。それに関連し、宋時代の画絹が緻密な織りであるのに対し、明時代のそれは隙間が大きく、裏からの彩色が効果的に施されている点が着目されました。この裏彩色は綺麗な発色を実現し、重要なものを浮かび上がらせるといった効果があります。その他、色の違いによる立体表現、実写の問題などについて触れられましたが、明の花鳥画は「装飾性」というマイナス面の強い言葉で評価されがちであるが、その時代の芸術的な意志を積極的に評価すべき、との見解が示されました。

参加者：57名

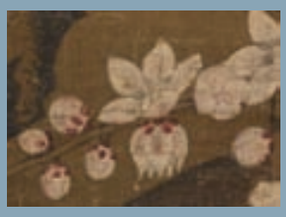
紀鎮「春苑遊狗図」(全図)



部分・落款（錦衣＝画院画家）



部分・庭の縁石（白い裏彩色）



部分・桃の花（雌蕊や臙脂色）

部分・親犬（毛並みの表現）

部分･子犬（眼球の青色）

お知らせ

「高精細画像による文化財研究」の創刊

これまでに５回の公開研究会を開催してきましたが、その内容をより広く知っていただくために、誌面の形にまとめました。ここでは画像を多数用いて、この研究会の意図が伝わるように配慮しました。本誌は今後も、編集を終えたものから継続して発刊していく予定です。創刊号は以下の通りです。

高精細画像による文化財研究　第１号
題　目　高精細画像でみる和鏡
発行日　2012年３月30日
内　容　第２回公開研究会
講　師　川見典久氏（黒川古文化研究所研究員）
場　所　黒川古文化研究所
開催日　2009年11月14日
文様の制作方法と工夫点・研磨について・蓬莱鏡における文様について・愛染明王蓬莱鏡における比較

博物館開設準備室通信　第６号
MUSEUM PLANNING OFFICE NEWS No.6
2012.4.1

関西学院大学博物館開設準備室
〒662-8501
西宮市上ケ原一番町 1-155
TEL 0798-54-6054　FAX 0798-54-6066